



オカラ山 の冒険

川崎ゆきお

オカラ山は魔の山と呼ばれ、一般の人は登らない。また、その麓まで来る人も希だ。なぜなら、その先は何もないからだ。無があるのではなく、その先は村も畑もない。山また山だ。その山岳地帯を抜けたところに人里はあるが、オカラ山経由では遠回りになる。

つまり、オカラ山は用事がない山なのだが、冒険者にとっては、それが用件となり、結構人が訪れる。

その麓に登山口があり、そこに薬屋が屋台を出している。日用雑貨品も置いている。「また、馬鹿がお山に入ったとさ」

薬屋が隣で屋台を出している焼き芋屋に言う。

屋台は複数出ている。いずれも冒険家のための店だ。

「馬鹿呼ばわりはいけないよ薬屋さん。私らそれでオマンマいただいているんだからね。大事なお客さんじゃないか」

「まあそうなんだが焼き芋屋さん。あんた、こんなところで芋など出して儲かるのかい」

「買う人がいるから出してるんだよ。里の三倍の値段でも買う馬鹿がいる」

「あれあれ、あんたも馬鹿呼ばわりしているじゃないか」

「ああ、それは言っちゃいけないことだね」

「今年も戻ってこなかった冒険家が多いねえ。まあ、毎年だけけど」

「石工屋が笑いが止まらないらしいよ」

登り口に石仏がずらりと並んでいる。上の方にはまだまだ余地がある。いくらでも並べることができる。

「冒険家って、金になるのかね」

薬屋が聞く。

「ならないよ。だってオカラ山にはお宝は何もないよ。逆に空気が薄い」

「息苦しいねえ、中腹あたりから」

「行ったことがあるのかね」

「薬草採りでね。しかしもうちょっと先からは木も草も生えていないよ」

薬屋は焼き芋をかじる。

「じゃあ、どうしてお山に登るのだろうねえ。登ってもすぐに戻るんじゃないよ」

薬屋が聞く。

「だから、それが冒険なんだよ」

「冒険ねえ」

「オカラ山を征服すりゃ、冒険家として名が上がるんだ」

「いくらでも登ってるじゃないか」

「ステータスっていうやつだよ」

「ほう」

「それにオカラ山に登ってないってのは冒険家としてはモグリだ」

「じゃ、オカラ山を征服すれば、冒険家として一人前ということかい」

「あんた何年、ここで商売してるんだ」

「ガイドになるわけじゃないから、いいんだ。知らなくても」

薬屋は焼き芋を食べきる。

「ねえ、焼き芋屋さん」

「何だい。クレームかい。この芋について」

「そうじゃない。今、考えたのだが、冒険家の上がりは、石仏かなあってな」

「え」

「いや、あの石仏になるのが目的かなって」

「そんな訳ないよ。あれは失敗した冒険家のなれの果てだよ。だから供養しているんだ。化けて出ないようにな」

「しかし、馬鹿だねえ。用もないのに山に登って死んじゃう」

「馬鹿呼ばわりはいけないよ。それで、こちとら食わしてもらっているんだからさ。褒め讃えないと」

「そうだね。ありがたやありがたやの冒険家様」

了